東京あさぼらけ

校訓
至誠励業
剛健成風
操守堅固

発行所
東京福中・福高同窓会広報委員会
〒160-0023
東京都新宿区西新宿7-20-16
ダイカンプラザシティⅡ304
原口法律事務所内
TAL　03-3361-9633
FAX　03-3369-6664

《活躍する同窓の仲間たち》

肖像画の新しい世界を切り開く

肖像画家　小野日佐子さん（高22）

各界で活躍する福中・福高の同窓生たちは数知れずですが、今回から毎号、編集部の独断をお許しいただいて紹介していきたいと思います。初回は、政治家から科学者、女優、ミュージシャンなど世界の大物たちの肖像画を描いている高校二十二回卒、小野日佐子さんに迫ります。その作品はどれも「命の鼓動が脈打つ」と表現するのがぴったりです。

―― 世界を駆ける活躍

平成九年（一九九七年）三月、国連本部でUNEP（国際環境計画）の創立記念イベントとして、「地球環境に貢献した二十五人の女性リーダーたち」と題した肖像画展をプロデュースしたのが小野さん。国連に働きかけ、マザー・テレサをはじめ、オリビア・ニュートンジョンなど世界各国・各分野の女性リーダーたちの魅力あふれる素顔をキャンバスに蘇らせ絶賛されました。

小野さんが描いたマザーテレサ

そして、事故死したF1レーサーのアイルトン・セナや、ゴルバチョフ元ソ連大統領、ブッシュ元米国大統領など著名な人物を描き続けています。

―― 運命の転機

二十九歳の冬、東京のデザイン制作会社から、イラスト室チーフにという誘いがあり上京。しかし、団体生活が苦手で一年三カ月後にフリーに。その後、手掛けた『会社四季報』の表紙の財界人の顔の連載が好評を呼び、大物俳優、ショーン・コネリーのポートレート制作という大仕事が舞い込むことになり、これが世界に飛躍する足掛かりになったのです。

―― （財）ヴィジュアル・アーツ・ファウンデーションを創設

芸術文化活動の普及振興を通して世界の交流に役立ちたいとこの財団を設立し理事長に就任。小野さんの実力と交際の広さから役員には国内外の著名人が名を連ねています。

―― 現在の活動は

パステルプランニング（プランニング会社）、パステルインターナショナル（デザイン制作会社）、アベインターナショナル（特別な食品やアートを販売する会社）のオーナーとしても活躍中です。

―― 将来の夢

「山に入り自給自足の生活をしながら絵を制作し、いろんな動物と一緒に風呂に入りたい。環境に優しく、できるだけ消費しない生活をしたい」と超多忙な生活を送るマルチ人間は、夢を語ってくれました。

プロフィール

昭和26年　福岡市名島生まれ。名島小→多々良中→福高→東京デザイン学校
43年　福高在学中より「光風会」津田画伯に師事、人物画の制作を始める

オリビア・ニュートンジョンの肖像画の前でオリビア本人と小野さん

会長あいさつ

「継続は力なり」で

会長　三野　定（中15）

『東京あさぼらけ』第二号が発刊されることになって、大変喜んでいます。事務局長はじめ広報委員の皆さんのご苦労に心から感謝致します。

昨年六月、思いもかけぬ成り行きで、バルト三国の一つエストニアの首都タリンを訪れました。そこで胸を打たれたのは、「唱う革命」の話と歌の祭典の会場でした。

エストニアは十八世紀初頭、ロシア皇帝の統治下に入り、その後二世紀にわたって農民は奴隷同様の生活を送らされたのです。ロシア革命後、幾度も独立しようと試みたのですが、その都度つぶされ、随分搾取もされたようです。

ソ連は、コソボ紛争で知られたような民族の強制的な〝入れ替え〟もやっています。

そのような逆境の中で、エストニア人の独立への願望を繋ぎ、団結を維持し得たのは、歌の祭典だったといいます。一九八八年六月に催された祭典には、毎夜十万人を超える人々が集い、独立への願望を歌に託したのです。

爾来、この夏の行事は、「唱う革命」（Singing Revolution）と呼ばれています。

ソ連の弱体化もあり一九八九年にエストニアは、やっと独立を果たしました。

我が国は北方四島の返還を求めていますが、我々は長い長い闘争の粘りを、エストニアの人たちに学ばねばなりません。そして「継続は力なり」を認識せねばなりません。

さて『東京あさぼらけ』は一昨年、奇しくも『関西あさぼらけ』と時を同じくして発刊されました。その偶然に驚くとともに、互いに競い合おうとエールを交換しました。それだけに、昨年の休刊は残念でしたが、これからは続けましょう。

「継続は力」です。何かを成すことができます。皆さんのご支援を切にお願いします。

福中第一回卒

田中太郎さん（95歳）に聞く

長寿の秘訣は「あせらず、悲しまず、たじろがず、はばからず、やりすぎず……」

福中第一回卒（大正十一年）の大先輩である田中太郎さん（横須賀市在住）は、六年前に新聞の同窓会案内で東京福中・福高同窓会総会の開催を知って出席され、その後も出席いただいています。今回、九十五歳の誕生日をお元気で迎えられたのを機にお話をうかがいました。

二年間は修猷館の寄宿舎を仮校舎に

――満九十五歳、おめでとうございます。

田中 ありがとうございます。明治三十七年（一九〇四年）八月三日の生まれです。日露戦争開戦の年で、名前の「太郎」は、当時の内閣総理大臣である桂太郎に因んで付けられました。

――ご出身は。

田中 佐賀県の鳥栖です。鳥栖尋常小学校に入学しましたが、福岡市の中之庄町に移転し、轟尋常小学校を卒業し、新設の福岡中学校に入学しました。

――福中時代の思い出を…。

田中 入学した当初はまだ校舎がなく、二年間は修猷館中学の寄宿舎を利用した仮校舎に通いました。同期生は二百名でした。当時の電車賃が一銭五厘だったのを覚えています。

軍事教練があり、中園淳太郎先生にしごかれたのを思い出します。特にゲートルを巻くのが大変でした。また、英語の楢崎広之介先生は厳しく、孟宗竹の棒で叩かれましたね。

それに、当時は相撲が盛んで、相撲大会で修猷館と対戦し、福中が勝って意気揚々と行進をしました。私は出場しませんでしたが、同級生たちと卵の差し入れをしました。

三年の時に新校舎に入りました。福中の隣のタバコ工場（現ＪＴ）の倉庫に入り込み、葉巻を失敬して吸ったこともありました。

私のあだ名は「ミスターワイヤー」で、文字通り身体が細かったのですけれど、頑健で福中時代は皆勤でした。山登りが好きで、一人で英彦山、阿蘇山にも行きましたよ。

食べ物は百回噛む

――卒業後は…。

田中 当時の進学先は旧制の高等学校や陸軍士官学校などがありました。私は、父の転勤で茨城県の古河に転居しましたこともあって、浦和高等学校に入りました。新設の高校でしたから、ここでも第一回の卒業生です。

大学は東京帝国大学工学部機械工学科に進み、昭和三年に卒業して鉄道省（国鉄・ＪＲの前身）に採用されました。当時は不況で就職難でしたが、運よく入れました。

戦後は運輸省に移り、昭和二十七年に退官しました。

退官後は機械・電気関係の会社を設立し、カセットレコーダーのオートリバース装置や自動車の電動方向指示器などの特許を取得しました。

田中 私の場合、食べ物をよく噛んで咀嚼するよう気をつけています。百回噛むようにしています。

また、あせらず、悲しまず、寂しがらず、たじろがず、嘆かず、はばからず、紛らわさず、やり過ぎず、乱暴せず、わめかずを心掛けて日々を過ごしています。

――最後に長寿の秘訣をお聞かせください。

――本日は、良いお話をありがとうございました。ますますお元気でお過ごしくださいますよう後輩一同お祈り致しております。

東京福中・福高同窓会
ホームページへどうぞ

アメリカからも「懐かしかぁ！」

加藤 忠夫（高15）

東京福中・福高同窓会ホームページを開設して、もう三年に入ります。三年前の同窓会総会担当が五回、十五回、二十五回卒業に回って来た際の準備の会合の席で、いかにすれば総会出席者を増やせるかで議論になり、「宣伝が必要だ！」「若い人に来てもらうには、ホームページが一番よい」「じゃ、ホームページを作成したことのある人？」―そのとき迂闊にも小生「ハイ！」。その結果、「では加藤さん、ホームページの作成をお願いします」という安易な動機と安易な人選で同窓会の臨時ホームページを開設してしまったわけです。

それがいつの間にか同窓会の正式ホームページとなり、予算までついて今日に至っています。

開設当時、どれほどの効果があるのか全くの未知数でしたが、日を経るにしたがって少しずつ訪問者が増えて、アメリカから「異国の地で懐かしく拝見しました」とか、大学の先生から「助手の募集記事を載せてほしい」など、実にいろいろの方たちから連絡をいただいています。

住所変更・登録等も当初はどれほど希望が来るのか心配していましたが、結構ボツボツ入ってきます。同窓生のホームページへのリンクも少しずつ増えています。

私の夢としては、本家の福岡の同窓会でホームページを開いていただき、住所録などはそこで一元管理して、各地域のホームページは地域の同窓会活動の核となり、会員の交流の中心として位置付けていきたいのですが……。

それに、もっと世代間の交流を盛んに出来る場を作っていきたいと願っています。最後に、ホームページの運営に協力していただける方、連絡をください。また、こんなことをやって欲しいなどのご意見もぜひお寄せください。（５ページに関連記事）

ホームページのアドレスはｈｔｔｐ://ｎｅｔｐａｓｓｐｏｒｔ－ｗｃ．ｎｅｔｐａｓｓｐｏｒｔ．ｏｒ．ｊｐ/～ｗｆｕｋｋｏｕ/

「東京福中一八会」の始まり（創刊号続き）

ラガーマン最高の栄誉「キャップ」の友と……

諸岡　健治郎（高1）

初回の会合からしばらくして、幹事役をしてくれた渡辺哲可君が日立製作所の子会社の社長として栃木県へ転勤することになったので、その壮行会を兼ねて昭和五十八年二月十七日に湯島の玉善という小料理屋に集まりました。

その顔触れは大石勇吉、片山伸也、國崎一郎、志波正孝、田渕靖昌、土屋英明、平野治、帆足昭蔵、三亀順蔵、宮石哲郎、宗像博人、諸岡健治郎、渡辺哲可の各君、それにその日、福岡から上京して来ていたラグビーの宗博之君も加わり、十四名となりました。

当日は土屋英明君が、ラグビーの「キャップ」（国代表チーム同士の公式国際試合に出場した選手に与えられるラガーマン最高の栄誉）の授与を受けて間もない時期だったので、「どんなものか」という同期生たちの要望に応えて、照れながらも現物を披露してくれたのです。

右から二人目のキャップを被っているのが故土屋英明君

同席者も、またとない記念だと互いに被りあったりして会が盛り上がったものでした。

そして、昭和十八年入学の我々の集まりを「東京福中一八会」と正式に名付け、会長には昔からのガキ大将がよかろうということで、土屋君が引き受けさせられたのでした。そして、いつもの調子で「今度の一八会は、もう少し広かとこでカラオケば置いてパーッとやろうや」おい、オキュウトば切らせるけん、二次会に行こう」などと大いに語り合ったのですが、思えば、それが彼との最後の会話となってしまいました。

彼はその年の六月十三日、心不全のため突然逝ってしまったのでした。

まだ五十四歳の働き盛りでした。

※

前号で紹介した築地の新三浦での同窓会の出席者に大石勇吉君の記載を漏らしていました。お詫びして訂正します。

博多だより

母校校舎に晴れの「福岡市都市景観賞」

思い出深い母校の校舎が昨年十一月九日、「福岡市九九年度都市景観賞」に選ばれました。この賞は十三年前に創設され、都市空間を演出する優れた建物や企画などを表彰するもので、市民から対象を募集しています。今回は過去最高の九百五十八通の推薦が寄せられ、母校校舎は九州大学事務局第一庁舎、福岡簡易保険事務センターなど他の七件とともに選出されました（写真は、福岡市九九年度の「市民市景観賞」）。その内容が掲載された新聞記事です）。

一般表彰された中央区大名の「キキプレイス」

福岡市99年度都市景観賞

福岡市は九日、都市空間や建物などを表彰するもので、博多区堅粕の県立福岡高校（一般表彰）や、ミニシアターなどを備えた「市民市景観賞」の情報誌「シティ情報ふくおか」（特別表彰）など八件を選び、「表彰式」を開いた。

今回で十三回目に創設された「市民市景観賞」は、市民から対象物件を募集している。本年度は過去最高の九百五十八通が寄せられた。「新しい物ばかりでなく、福岡高校のほか、福岡県保健環境センター（中央区大濠公園）、九州大学事務局第一庁舎（東区箱崎）の大正から昭和初期の建築物にも光を当てた」ほかの一般表彰は、中村学園大学工学部（城南区）、ラレイス（博多区）、一般家（南区）の三人。

福岡高など8件選定

エッセーは河替さ。ら4人

福岡高校の中学生、さんの「ふるさとの川」、四点は、一般部門に選ばれた。

恒例行事として定着した学年同窓会 ホームページも開設

野田　邦弘（高22）

わが福高二十二回生は、同二十三、二十四回生と一緒に、一九九七年の東京福中・福高同窓会の幹事を担当しました。

この同窓会を盛り上げ、成功させるため、二十二回生の集まりを九六年の暮れに開き、二十名弱が参加して旧交を温めました。九七年の同窓会終了後も、毎年一回十一月ごろに二十二回生の同窓会を東京で開催することにし、九七年、九八年に続き九九年も十一月十九日に有楽町のニュートーキョーに集まりました（幹事は鳥飼辰登、鍛冶文枝＝旧姓豊福）。

運営費を徴収し、幹事を持ち回りとするなど学年の恒例行事として定着したと思います。毎回二十人程度の参加があり、高校卒業以来二十数年ぶりに再会するケースも多く、毎回誰が参加するか楽しみです。また、女性だけの集まりも何度か行ったそうです。

なお、二十二回生のホームページも右のアドレスで開設しましたので、ぜひご覧ください。

ホームページのアドレスは
http://netpassport-wc.netpassport.or.jp/~wfukkou/K22/K22PAGE.HTM

たことになりますが、まだまだ十分な耐久性を持っているとのことです。

昔の良い建物が博多の町から次々と消え去っている今日では、母校の校舎は貴重な歴史的建築物です。

在学中、「この校舎が建った頃は、県内はもちろん県外からも多数の見学者が訪れた」と聞いたのを思い出します。

維持管理には関係者皆さんのご苦労も多いことでしょうが、これからも長くその懐かしい姿を私たちの前にとどめてほしいと願っています。

校舎の外壁は美しくなり、門扉は新調され、さらに中庭（パティオ）には同窓生の外尾悦郎さん（高二十五回）制作の素晴らしいモニュメントも。博多へ帰省された時は、ぜひ訪ねてみてください。

（高16回・広報委員　齋藤　利久記）

なんぼしょっと

元気印も初めて入院・手術を体験。でも何かを始めたい

水月　和子（高４）

人から「元気印」と言われ、私自身も健康だけは人並み以上という思い込みから年も考えずに飛び回っていましたら、一昨年春、同窓会総会を目前にして突然、心臓の弁が壊れるという事態が生じ、生まれて初めて入院、手術、療養生活を体験しました。少しの手遅れで命を無くしていたかもしれなかった、と後で聞かされ、健康を過信することの怖さと体力の限界を知りました。

「今まではウサギのように跳ね回っていたけれど、これからは亀のあゆみを」と、これは同級生の一友人からのありがたい忠告でした。この言葉を心して、今は仕事を持つ娘の子育てを手伝いながら元気に過ごしています。

私たち高校四回卒業生は、昨年「潟洲町の出会いから五十年」を迎え、秋に記念の同窓会を開きました。いつの間にかシルバーエイジ突入です。久しぶりに参加して懐かしい友達に会い、顔を合わせた瞬間はお互いに年を取ったなと感じましたが、そこは同級生、話しているうちにタイムスリップして十代の昔に帰り、楽しく賑やかなひとときを過ごしました。

体力や記憶力は年とともに低下しても、日だまりで背を丸めて過ごすようになるにはほど遠く、まだみんな意欲、活力は若々しく元気でした。その若さを長く維持していくためにも、積み重ねてきた貴重な知識や体験を出し合って、世の中、人のため、自分のために何か始めようという話も出ました。

縁あって「東京福中・福高同窓会」のお手伝いをして参りましたが、故郷を離れて暮らしている私たちの、ひとつの心の拠り所となるこの「東京福中・福高同窓会」が、時が違っても同じ潟洲町で過ごした先輩、後輩との新しい出会いの場となり、縦の繋がりを強めて、ますます発展し充実していくことを心から期待しています。

女房も呆れる我らが「付き合いの濃さ」

八久保　弘之（高９）

会社を北九州市・戸畑に移すと同時に八幡に単身赴任してから早いものでもう一年が過ぎ、夫婦二人で福間町に住まいを移してからも半年を超えました。

当地での一年は、活気はあったものの雑踏に紛れて過ごした東京とは全く別の生活です。まず、人情に厚いものを感じる場面が多いことです。次にラッシュアワー時の混雑度の違うこと。毎日座って通っています。また魚が新鮮で安いこと。先日、居酒屋でカンパチを頼んだら、たった千七百円で何と半身が刺し身、残りの半身が握り寿司、頭と骨がみそ汁で出てきました。これには、ただただ感激！の一言。

九回生は九栄会と呼んでいますが、この付き合いがホントに多いです。年一回の九月九日の例会は勿論のこと、年三回のメモリアル・クラシックゴルフコンペ、十二月は当然のことながら忘年会、新宮松比古君（福岡県議会議員）の選挙があると応援に集まり、何もなくても「みずかみ」に行けば、九栄会の誰かが飲んでいる。

この付き合いの濃さには、女房が呆れています。先日も同窓生夫婦と九州場所の相撲を見てから、ここで他の同窓生と一緒になり、それが縁で柴犬の子をもらうことになりました。今日、その子犬がわが家に来て、今「くーんくーん」と甘え鳴きをしています。カワイイ！

さて、最後にお願い事です。一昨年は広報委員長として、皆さんの応援を得て『東京あさぼらけ』の予告号と創刊号を発行しましたが、私の転任後一年間発行をパスしたと聞いて誠に残念です。

私のような素人でも、皆さんの協力で曲がりなりにも発行できたのですから、かつて福高時代に新聞部で活動された方々、社会に出てこの方面で活躍の方々、経験がなくてもひとつやってやろうと意欲のある方々に、ぜひ『東京あさぼらけ』の発行を続けていっていただきたいものです。

―元勘定奉行より―

年会費は活動の貴重な血液 くれぐれも皆さんよろしく

亀山　忠義（高８）

「誰か会計をやってもらいたいのですが」。五年前の幹事会の席上で、馬場一廣事務局長（当時。現副会長）の視線が私に止まった時、うっかり手を挙げてしまったのです。いつも会社で経理の仕事をやっているから、同窓会の会計なんてとタカを括ったのが、大失敗でした。

年会費が振り込まれるシーズンには、毎日五十枚くらいの払込通知票が届くのです。名簿を切り貼りしたノートに、何回卒の誰からと間違いのないようにチェックしていくわけですが、これが容易でないのです。

卒業したのは、遥か昔のことなので仕方がないかもしれないものの、卒業回が違っているもの、あるいは「分からない」と書いてあるもの。これらをチェックするために会費払込票の通信欄には、「○○回（○○年卒）」とあるのですが、全くブランクのままのがかなりあります。名簿を何回もひっくりかえして調べ、それでも分からない時は、ご本人に電話することになります。

各回の幹事さんが会費払込票を同期の皆様方に送る際には、大変お手数でしょうけれども、ぜひ「○○回（○○年卒）」と記入をお願いします。

会費払込票の所定欄が、やや狭いせいか、住所は記入してあるのに、肝心要の氏名がないのが一番困ります。

同窓生結婚も珍しくないのですが、たとえ扶養家族であっても、会費は二人分お願いします。

通信欄のコメントに、「主人は、昨年亡くなりました。皆様には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます……」には、思わず胸が熱くなりました。

※

年会費は同窓会活動の貴重な血液です。皆様、くれぐれもよろしくお願い申し上げます。

年会費納入状況の推移

平成11年度は9月末現在

卒業回数	平成９年度	平成１０年度	平成１１年度
福中卒業生	121	119	110
福高１回生	28	26	23
2	26	27	22
3	38	27	21
4	25	25	22
5	44	50	39
6	38	44	35
7	36	26	17
8	42	48	40
9	9	25	6
10	48	44	46
11	34	32	32
12	38	38	32
13	4	4	3
14	20	23	21
15	23	32	21
16	22	21	23
17	37	37	31
18	35	22	25
19	34	30	21
20	21	15	8
21	15	11	12
22	34	32	19
23	28	14	0
24	32	19	18
25	5	24	10
26	31	29	20
27	14	8	8
28	1	0	1
29	9	12	0
30	0	12	11
31	14	3	2
32	0	8	12
33	21	1	0
その他	5	25	1
合　計	932	913	712

4月の同窓会総会の成功に向け
昨夏の〝決起集会〟に36人も参加

古賀　成治（高17）

関東地区の福高十七回生同窓会は例年七月の最終土曜日に開催していますが、平成十一年七月三十一日、東京麹町「ふくおか会館」で行いました。福岡から安東治先生にお越しいただいたのをはじめ、北は帯広から南は博多までの同窓生総勢三十六人という賑わいで、しかも、遠方の参加者が多かったのにもかかわらず、出席した全員が二次会に参加するなど、今までにない盛り上がりを見せました。

この四月には、私たち十七回生が東京福中・福高同窓会総会の当番幹事を七回生、二十七回生と共に務めなければなりませんので、総会準備のスタートに当たっての決起集会ともいうべき会となり、関東以外の遠方からの仲間が激励と支援に駆けつけてくれました。福岡からは白石正彦君と古川正敏君、広島から安永壽壮君、名古屋の高橋雪雄君、さらに帯広からは川内重美君が来てくれました。

この日、千葉の幕張では「GLAY20万人ライブコンサート」、隅田川では伝統の花火大会があり、東京は三十五度の炎暑。同窓会場は、それに負けず劣らず熱く盛り上がりました。

開会に際して、まず、七十五歳の今も変わらずスマートでダンディーな安東先生から「五十歳を超した君たちも、いつまでも若いわけでない。これからは健康に留意して、悔いのないよう社会、家族のために頑張ってほしい！」と激励のご挨拶をいただいた後、永久幹事の白石君から福岡の近況報告があり、彼の乾杯の発声で開宴しました。

さらに古川君からは、パキスタンとアフガニスタンで医療活動に尽力している同期の中村哲君の「ペシャワール会」への一層の協力要請と、総会の成功に向けての檄が飛びました。

そして、初参加組の青井健二君、笠進君、坂本洋一君、山田潤一君、津崎（旧姓勝木）公子さんに、それぞれ近況報告してもらい懇親を深めました。

一方、門田先生をはじめ、出張や仕事、家事の都合などで出席できなかった同窓生たちからの返信葉書をすべてコピーして出席者全員に配布、その「近況報告」「出席できない理由」「同窓生へのメッセージ」などに懐かしく見入っていました。

二時間余りの懇談後、東京と名古屋で教鞭をとっている声楽家の川田良三君指導による校歌斉唱に引き続き、応援歌を遠来の白石君たちの音頭により歌い納め、一次会はお開き。二次会は、赤坂東急ホテル「花のれん」に会場を移し、一丸秀彦君の進行のもと全員が掘り炬燵式の個室で膝を交えながら話に花を咲かせました。

（６ページに関連記事）

高12回卒同窓会
タイムスリップの楽しい時間を共有

卒業後二十年目に有志の呼びかけで関東在住者たちの同期会が始まりました。それ以来、卒業回にちなんで「十二（トフ）会」と名付けて、ほとんど毎年集まっています。

徐々に名簿も整理され、関東一円に同期卒業生の約三割が数えられています。それぞれの帰郷時や仕事関係での往来等で地元福岡との交流も多く、特に〝失敗系の出来事〟は、すぐに全体に広がる覚悟が必要ともささやかれています。

昨年は十二月二日、学士会館で二十五人参加の下、衆議院議員の渡辺具能君（三年余前の選挙戦の折には関東勢も大いに盛り上がったものです）の乾杯の音頭と、渦中の人・プロ野球巨人軍球団代表、山室寛之君の挨拶で開宴し、学生時代にはよく知らない者同士だったり、また何十年ぶりでの再会であっても、一堂に会すと同じ学校で同じ時代を過ごした者として、一挙にタイムスリップして特有の楽しい時間を共有しました（写真）。加齢とともに酒量も少しずつ控えながら、健康に留意して次回を期そうと校歌斉唱で二次会へと流れていきました。（小松紘一記）

同窓会ミニ歴史
東京同窓会の新スタートの頃

東京同窓会のホームページを開いたのが、この原稿を書くきっかけです。

見ているうちに、東京同窓会が会則や組織を確立して新たなスタートをした十年前の平成二年（一九九〇年）四月二十四日のことが懐かしくなってメールを送ったところ、編集委員から「その頃のことを書いてほしい」と依頼されたのでした。

当時、私は仕事で東京と神戸を行き来していた関係から、昭和五十九年に設立された関西福中・福高同窓会の設立の経緯や会則のことなど知っていたこともあって、東京同窓会の新スタートのために、その辺の話をと求められたのでした。

そこで話したのは、関西同窓会設立の発端が当時の進藤一馬・福岡市長（中一回）の「関西にも同窓会を」の音頭で、高八回生が中心になって同窓会名簿や電話帳から関西在住の同窓生約八百人を調べ上げて五月のメイフラワー号船上で盛大に設立総会を開催したこと。そうしたなか、当時の大隈壮介会長（中一三回・現東京会員）の指導の下、週に二、三回も集まり練りに練った会則を完成させたことなどでした。

現在の東京の会則は、この関西の会則が基になっているのです。

また、当時は私も総会の幹事をやりましたが、大スクリーンを使った母校の体育祭の応援シーンや博多山笠の模様など放映した際の、皆さんの懐かしさいっぱいの歓声は今も忘れられない思い出です。

東京同窓会の歴史ではありませんが、もう一つご紹介しますと、関西同窓会のUターン組が中心となって博多に「関博会」を結成して、毎年、母校の同窓会総会前日の土曜日に盛大に集まっています。皆さんの参加も歓迎します。

最後に、東京同窓会の更なる隆盛をお祈りします。

（在博多・高12回・久木田毅）

編集部のメモ帳から
同窓会活動の発展に若い世代の力を

「東京あさぼらけ」に二十、三十代の若い世代の声をと、編集部でツテや名簿を頼りに探し回ったものの締め切りまでに成果を得られず、今号は登場いただけなかったのが残念です。

この世代は、独身者やまだ家族が少ない人が多く、また仕事でも移動（異動）が多いためか連絡が取りにくいのです。例えば、平成九年四月現在の同窓会名簿で三十代前半の三十六回（昭和五十九年卒）と三十八回（同六十一年卒）の三十五人を任意に選び、ある平日の午後八時～十時の時間帯に電話したところ、連絡が取れたのは二人だけ。不在者以上に名簿発行後の三年弱の間に転居している人が多くなっていました。

また、連絡の取れたお二人も「名簿や同窓会新聞は来ていないので見たことがありません」「東京に同窓会があったのですか」と。同窓会活動に若い力をどう吸収していくか、大きなテーマのようです。

会員の皆さんのご意見やご提案を―。

なんばしょっと

平成12年度・東京同窓会総会幹事報告

4月28日を「世代を超えた呑み会」に!

大屋 龍二（高27）

四月二十八日（金）、市ケ谷・アルカディアで開催される平成十二年度、東京福中・福高同窓会総会開催の準備がスタートしたのは、十一年度の総会が催された翌月、昨年五月のことでした。

前回の二十六回生幹事、十七・二十七回）代表数名と前回幹事の間で引き継ぎを行いました。

過去三年の資料も預かり、六月には一回目の幹事会の場を設けました。内田省三さんはじめ七回卒の先輩方、一丸秀彦さんたち十七回の先輩、そして私たち二十七回生有志が一堂に会し、さっくばらんな意見交換を行いました。

これをきっかけに毎月一回の定例会を開くことになり、次回総会の日取り、方向性などが決まっていきました。

各回の出席者の意見は見事なまでに一致しました。「年に一回の同窓会なんだから、じっくり呑もう。話そう」――。こうして、十二年度の懇親会の大枠は「講演会を行わない、世代を超えた呑み会」に固まったのでした。

じアルカディア、講演者をラグビーの森重隆さん（高二十二回）にお願いし、その結果モチーフをラグビーにすることを最初に決定。幸いにも幹事の十六回生のラグビー部卒業生を通じてお願いし、森さんの快諾をいただきました。

それを受けて総会案内は、マンガ家の長谷川法世さん（高十六回）にラガーマンのイラストを、また会場の受付には、建築家の磯矢亮介君（高二十六回）にラグビーをテーマにしたオブジェ作品の展示をお願いしました。

幹事会でもめたことの一つは物品販売の問題でした。明太子やおきゅーとなどの販売は、同窓会を盛り上げるにはもってこいの企画ですが、食品や金銭の取り扱い、売れ残り等の問題があり、当初は消極的意見が多数でした。しかし、ある明太子メーカーが、すべてを引き受けてくれて解決しました。

また、苦労したのは若い世代への連絡でした。当番幹事には三十六回生や四十六回生は参加していません。彼らは現在三十四歳と二十四歳、関東地区にも多数の人が在住しているはずです。

しかし、そうした若い世代については組織や名簿の整備が不十分で、連絡は困難を極めました。できれば、卒業時に同窓会組織の紹介や、登録をお願いするなどの組織作りが行われることが望まれます。

さて、いよいよ年も明けた平成十一年二月、総会開催の通知を発送。幹事会の議題も当日の具体的な進行が中心になりました。会場の準備、総会の司会、講演会の進め方、そして懇親会の進行などです。

総会当日は、午後四時に幹事が控室に集合、配布資料の準備、進行の最終確認を行い、午後五時から受付開始。幹事一同さまざまな思いのなか、半年以上をかけて準備してきた同窓会総会がいよいよ始まったのです。

まず同窓会総会の議事も無事終了、大盛況の森さんの講演会に続いて最後は懇親会。時間はわずか一時間十分でも、非常に密度の濃い懇親会だったと感じました。

※

幹事の皆さん、本当にご苦労さまでした。それに、幹事以外でご協力いただいた皆さん、ありがとうございました。さまざまな分野で活躍されている卒業生皆さんのお力を借りて、何とか無事に終えることができました。

次回も楽しい同窓会総会になることを祈りつつ、報告を終わります。

平成11年度・東京同窓会総会
当番幹事報告

盛況だった総会の舞台裏
奮闘記あ・ら・かると

土井 健二（高26）

平成十一年度の東京福中・福高同窓会総会が、四月十五日、市ケ谷のアルカディアで盛大に開催された。その時の様子は、福高通信「朝ぼらけ」（平成十一年十月一日号）で報告させていただきました。今回は、その当番幹事の同窓会総会開催までの苦労話（？）をご紹介します。

平成十一年度同窓会総会の当番幹事は、福高六回生、十六回生および二十六回生。例年、総会には約三百名が出席しますが、上は福中一回生から下は大学生までと年齢層が広く、その意味もあって三世代にわたる卒業生が当番幹事を務めることになっています。

その第一回幹事会は平成十年九月十六日。前年幹事の五、十五、二十五回生の皆さんにも参加していただき、幹事会の運営方法や注意点など細かいアドバイスを受けました。その後、ほぼ毎月一回の頻度で約二十名程度が集まり、準備を進めました。会場は例年と同

▲昨年の同窓会総会のひとコマ▼

◇◇編集後記◇◇

◆今回は委員長ナシでの発行。その苦境を救ってくれたのが高14回の柴田さん。同期の福士さんという編集のプロに声を掛け、ご覧の紙面が出来上がりました。次号もより充実させるため、同期でご活躍の方の情報などお寄せ下さい。（原口）

◆同窓会事務局にパソコンを入れて、「東京あさぼらけ」をパソコンで編集・制作しようと思うからホームページ担当を手伝ってほしいと言われて、気が付いたら広報委員会に毎回出席している自分でした。（加藤）

◆田中大先輩には敬服するのみ。小野さん、福岡県副知事の稗田慶子さん（高6）など女性が大活躍。在校生の松尾梨沙さんも全日本学生音楽コンクール（九州・山口）ピアノ部門で第二位。頑張らねば……。（齋藤）

◆編集の手伝いをして大変さが分かりました。会長のおっしゃるように「継続は力なり」です。東京あさぼらけを継続発行し、発展させるには同窓会諸兄の協力が必要です。今後とも宜しくお願いします。（柴田）

◆小野さんのマザーテレサ像から「愛の反対は無関心」との彼女の言葉が浮かぶ。世界に殺戮や悪が絶えぬのは人々の無関心によるというのだ。同窓中村哲さんの実践もそう教える。（福士）